

篇文学全集
38

かの子
勉 淳



責任編集 臼井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集 第38卷

昭和43年 6月25日第一刷発行

岡 本 か の 子

著 者 武 田 泰 淳

水 上 勉

発行者 竹 之 内 静 雄

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

電話 東京(291)7651

振替 東京4123

製版・明和印刷

印刷・多田印刷

製本・鈴木製本

定価 360円

目次

岡本かの子

老妓抄 三

鮎 三

家 霊 四

みちのく 六

川 七

武田泰淳

美しき湖のほとり 五

非革命者 一〇

女賊の哲学……………一四

信念……………一四七

異形の者……………一四九

水上 勉

桑の子……………一五

棺……………二〇六

北野踊り……………二四

こおろぎの壺……………二五

鑑賞（小松伸六）……………二六

装幀 棚折久美子

、山の大貴家別荘で生まれ、

、多摩川のほとりでも過した。溝ノ口

、見女学校を卒業した。学校時代から、兄
た。明治三十九年、謝野晶子に師事し「明星」に投稿。

「明星」廃刊後は「スバル」同人として活躍し、明治四十二年岡本一平と結婚。結婚後の物心両面にわたる困窮した生活のなかで宗教に近付き、大乗仏教に達した。大正元年処女歌集「かろきねたみ」刊行。大正七年第二歌集「愛のなやみ」刊行。昭和四年渡欧し、七年帰国した。このころ、ようやく文学修行完了し、昭和十一年「文学界」六月号に「鶴は病みき」を発表し、文壇にデビューした。ついで昭和十二年三月「母子叙情」によって確固とした地位を築いた。昭和十三年には「老妓抄」「東海道五十三次」をはじめとして精力的に作品を発表した。その年の暮病にたおれ、昭和十四年四十九歳で死去。没後、遺作として「生々流転」「女体開顯」「家霊」「闇」（共に昭和十四年）などが続々と発表された。昭和二十二年、実業之日本社より「岡本かの子全集」全十二巻刊行。

老妓抄

平出園子というのが老妓の本名だが、これは歌舞伎俳優の戸籍名のように当人の感じになずまいとところがある。そうかといって職業上の名の小そのとだけでは、だん／＼素人の素朴な気持ちに還ろうとしている今日の彼女の氣品にそぐわない。

こゝではたゞ何となく老妓といって置く方がよろうと思う。

人々は真昼の百貨店でよく彼女を見かける。

目立たない洋髪に結び、市楽の着物を堅氣風につけ、小女一人連れて、憂鬱な顔をして店内を歩き廻る。恰幅のよい長身に両手をだらりと垂らし、投出して行くような足取りで、一つとところを何度も廻り

返す。そうかと思うと、紙風の糸のようにすつとものして行つて、思いがけないような遠い売場に佇む。彼女は真昼の寂しさ以外、何も意識していない。

こゝやうて自分を真昼の寂しさに憩わしている、そのことさえも意識していない。ひよつと目星い品が視野から彼女を呼び覺すと、彼女の青みが／＼た横長の眼がゆつたりと開いて、対象の品物を夢のなかの牡丹のように眺める。唇が娘時代のように捲れ氣味に、片隅へ寄るとそこに微笑が泛ぶ。また憂鬱に返る。

だが、彼女は職業の場所に出て、好敵手が見つかり、はじめはちよつと呆けたような表情をしたあとから、いくらでも快活に喋舌り出す。

新喜楽のまえの女將の生きていた時分に、この女將と彼女と、もう一人新橋のひさごあたりが一つ席に落合つて、雑談でも始めると、この社会人の耳には典型的と思われる、機智と飛躍に富んだ会話が展

開された。相当な年配の芸妓たちまで「話し振りを習おう」といって、客を捨て、老女たちの周囲に集った。

彼女一人のときでも、氣に入った若い同業の女のために、経歴談をよく話した。

何も知らない雛妓時代に、座敷の客と先輩との間に交される露骨な話に笑い過ぎて畳の上に粗相をして仕舞い、座が立てなくなって泣き出してしまったことから始めて、困いもの時代に、情人と逃げ出して、旦那におふくろを人質にとられた話や、もはや抱妓かかえこの二人三人も置くような看板ぬしになつてからも、内実の苦しみは、五円の現金を借りるために、横浜往復十二円の月末払いの俵くさに乗って行ったことや、彼女は相手の若い妓こたちを笑いでへとく疲おらせずには措かないまで、話の筋は同じでも、趣向は変えて、その迫り方は彼女に物の怪けがつき、われ知らずに魅惑の爪を相手の女に突き立て、行くよう

に見える。若さを嫉妬して、老いが狡猾な方法で巧みに責め苛せんでいるようにさえ見える。

若い芸妓たちは、とう／＼髪を振り乱して、両脇腹を押え喘あえいでいうのだった。

「姐ねえさん、頼むからもう止してよ。この上笑わせられたら死んでしまう」

老妓は、生きている人のことは決して語らないが、故人で馴染なじみのあつた人については一皮剥むいた彼女独特の觀察を語った。それ等の人の中には思いがけない素人や芸人もあつた。

支那の名優の梅蘭芳メイランファンが帝国劇場に出演しに来たとき、その肝煎きんいりをした某富豪に向つて、老妓は「費用はいくらかゝつても関かまいませんから、一度のおりをつくつて欲しい」と頼み込んで、その富豪に宥なだめ返されたという話が、嘘か本当か、彼女の逸話の一つになっている。

笑い苦しめられた芸妓の一人が、その復讐のつも

りもあつて

「姐さんは、そのとき、銀行の通帳を帯揚げから出して、お金ならこれだけありますと、その方に見せたというが、ほんとうですか」と訊く。

すると、彼女は

「ばか／＼しい。子供じゃあるまいし、帯揚げのなんのつて……」

こどものようになつて、ぶん／＼怒るのである。

その真偽はとにかく、彼女からかういううぶな態度を見たいためにも、若い女たちはしば／＼訊いた。

「だがね。おまえさんたち」と小そのは総てを語つたのちにいう、「何人男を代えてもつゞまるところ、たつた一人の男を求めているに過ぎないのだね。今こうやって思い出して見て、この男、あの男と部分部分に牽かれるものゝ残っているところは、その求めてゐる男の一部々々の切れはしなのだよ。だから、どれもこれも一人では永くは続かなかつたのさ」

「そして、その求めている男というのは」と若い芸妓たちは訊き返すと、

「それがはつきり判れば、苦勞なんかしやしないやね」それは初恋の男のようでもあり、また、この先、見つかつて来る男かも知れないのだと、彼女は日常生活の場合の憂鬱な美しさを生地^{きじ}で出して云つた。

「そこへ行くと、堅気さんの女は羨しいねえ。親がきめて呉れる、生涯ひとりの男を持つて、何も迷わずに子供を儲けて、その子供の世話になつて死んで行く」

こゝまで聴くと、若い芸妓たちは、姐さんの話もいゝがあとが人をくさらしていけないと評するのであつた。

小そのが永年の辛苦で一通りの財産もでき、座敷の勤めも自由な選択が許されるようになった十年ほど前から、何となく健康で常識的な生活を望むよう

になった。芸者屋をしている表店と彼女の住っている裏の蔵附の座敷とは隔離してしまつて、しかも、風の出入口を別に露地から表通りへつけるように造作したのも、その現れの一つであるし、遠縁の子供を貰つて、養女にして女学校へ通わたしたものもその現れの一つである。彼女の稽古事が新時代的のものや知識のものに移つて行つたのも、或はまたその現れの一つと云えるかも知れない。この物語を書き記す作者のもとへは、下町のある知人の紹介で和歌を学びに来たのであるが、そのとき彼女はこういう意味のことを云つた。

芸者というものは、調理ナイフのようなもので、これと云つて特別によく利くこともいらないが、大概なことに間に合うものだけは持つていなければならぬ。どうかその程度に教えて頂き度い。この頃は自分の年恰好から、自然上品向きのお客さんのお相手をするのが多くなつたから。

作者は一年程この母ほども年上の老女の技能を試みたが、和歌は無い素質ではなかったが、むしろ俳句に適する性格を持つてゐるのが判つたので、やがて女流俳人の××女に紹介した。老妓はそれまでの指導の礼だといって、出入りの職人を作者の家へ寄越して、中庭に下町風の小さな池と噴水を作つて呉れた。

彼女が自分の母屋おもやを和洋折衷風に改築して、電化装置にしたのは、彼女が職業先の料亭のそれを見て来て、負けず嫌いからの思い立ちに違いないが、設備して見て、彼女はこの文明の利器が現す働きには、健康的で神秘的なものを感ずるのだった。

水を口から注ぎ込むとたちまち湯になつて栓口から出るギザギザ、煙管の先でお圧すと、すぐ種火が点じて煙草に燃えつく電気蓑盆たばこぼんや、それらを使いながら、彼女の心は新鮮に慄ふるえるのだった。

「まるで生きものだね、ふゝむ、物事は万事こうい

かなくっちゃ……」

その感じから想像に生れて来る、端的で速力的な世界は、彼女に自分のして来た生涯を顧みさせた。

「あたしたちのして来たことは、まるで行燈あんどんをつけては消し、消してはつけるようなまどろい生涯だった」

彼女はメートルの費用の嵩かさむのに少からず辟易へきえきしながら、電気装置をいじるのを楽しみに、しばらくは毎朝こどものように早起した。

電気の仕掛けはよく損じた。近所の蒔田まきたという電気器具商の主人が来て修繕した。彼女はその修繕するところに附纏つづなって、珍らしそうに見ているうちに、彼女にいくらかの電気の知識が授とり入れられた。

「陰の電気と陽の電気が合体すると、そこにいろいろの働きを起して来る。ふーむ、こりや人間の相性あいせいとそっくりだねえ」

彼女の文化に対する驚異は一層深くなった。

女だけの家では男手の欲しい出来事がしばしばあった。それで、この方面の支弁も兼ねて蒔田が出入りしていたが、あるとき、蒔田は一人の青年を伴つて来て、これから電気の方のことはこの男にやらせると云った。名前は柚木ゆずきといった。快活で事もなげな青年で、家の中を見廻しながら

「芸者屋にしちゃあ、三味線がないなあ」などと云った。度々来ているうち、その事もなげな様子と、それから人の氣先を撥ね返す颯爽とした若い氣分が、いつの間にか老妓の手頃な言葉仇かたとなった。

「柚木君の仕事はチャチだね。一週間と保もった試しはないぜ」彼女はこんな言葉を使うようになった。

「そりやそうさ、こんなつまらない仕事は。パッションpassionが起らないからねえ」

「パッションpassionで何だい」

「パッションかい。ははは、そうさなあ、君たちの社会の言葉でいうなら、うん、そうだ、いろ氣が起

らないということだ」

ふと、老妓は自分の生涯に憐みの心が起った。パツシヨンとやらが起らずに、ほとんど生涯勤めて来た座敷の数々、相手の数々が思い泛べられた。

「ふむ、そうかい。じゃ、君、どういう仕事ならいゝろ気が起るんだい」

青年は發明をして、専売特許を取って、金を儲けることだといった。

「なら、早くそれをやればいゝじゃないか」

柚木は老妓の顔を見上げたが、

「やればいゝじゃないかって、そう事が簡単に……」

(柚木はこゝで舌打をした) だから君たちは遊び女といわれるんだ」

「いやそうでないね。こう云い出したからには、こつちに相談に乗ろうという腹があるからだよ。食べる方は引受けるから。君、思う存分にやってみちゃどうだね」

こうして、柚木は蒔田の店から、小そのが持っている家作の一つに移った。老妓は柚木のいうまゝに家の一部を工房に仕替え、多少の研究の機械類も買ってやった。

小さい時から苦学をしてやつと電気学校を卒業はしたが、目的のある柚木は、体を縛られる勤人になるのは避けて、ほとんど日傭取り同様の臨時雇いになり、市中の電気器具店廻りをしていたが、ふと蒔田が同郷の中学の先輩で、その上世話好きの男なのに絆ほだされ、しばらくその店務を手伝う事になって住み込んだ。だが蒔田の家には子供が多いし、こまこました仕事は次から次とあるし、辟易していた矢先だったのですぐに老妓の後援を受け入れた。しかし、彼はたいして有難いとは思わなかった。散々あぶく銭を男たちから絞って、好き放題なことをした商売女が、年老いて良心への償いのため、誰でもこんな

ことはしたいのだろう。こっちから恩恵を施してやるのだという太々しい考えは持たないまでも、老妓の好意を負担には感じられなかった。生れて始めて、日々の糧の心配なく、専心に書物の中のことゝ、実験室の成績と突き合せながら、使える部分を自分の工夫の中へ糅し取って、世の中にないものを創り出して行こうとする静かで足取りの確かな生活は幸福だった。柚木は自分ながら壮軀と思われる身体に、麻布のブルーズを着て、頭を鍔で縮らし、椅子に斜に倚って、煙草を燻らしている自分の姿を、柱かけの鏡の中に見て、前とは別人のように思い、また若き發明家に相応わしいものに自分ながら思った。工房の外は廻り縁になっていて、矩形の細長い庭には植木も少しはあった。彼は仕事に疲れると、この縁へ出て仰向けに寝転び、都会の少し淀んだ青空を眺めながら、いろ／＼の空想をまどろみの夢に移し入れた。

小そのは四五日目毎に見舞って来た。ずらりと家の中を見廻して、暮しに不自由そうな部分を憶えて置いて、あとで自宅のものゝ誰かに運ばせた。

「あんたは若い人にしちや世話のかゝらない人だね。いつも家の中はきちんとしているし、よぐれ物一つ溜めてないね」

「そりやそうさ。母親が早く亡くなっちゃったから、あかんぼのうちから襦袢を自分で洗濯して、自分で当てがった」

老妓は「まさか」と笑ったが、悲しい顔付きになつて、こう云った。

「でも、男があんまり細かいことに氣のつくのは偉くなれない性分じやないのかい」

「僕だって、根からこんな性分でもなさ相だが、自然と慣らされてしまったのだね。ちつとでも自分にだらしがないところが眼につくと、自分で不安なのだ」

「何だか知らないが、欲しいものがあつたら、遠慮なくいくらでもそうお云いよ」

初午はつうまの日には稲荷いなり鯨ずしなど取寄せて、母子のような寛くわぎ方で食べたくつろりした。

養女のみち子の方は気き紛まれであつた。来はじめると毎日のように来て、柚木を遊び相手にしようとした。小さい時分から情事を商品のように取扱いつけているこの社会に育つて、いくら養母が遮断しやたんしたつもりでも、商品的の情事が心情に染みないわけはなかつた。早くからマセて仕舞つて、しかも、それを形式だけに覚えて仕舞つた。青春などは素通りして仕舞つて、心はこどものまゝ固まって、その上皮にほんの一重大人ひとの分別がついてしまった。柚木は遊び事には気が乗らなかつた。興味が弾はまないまゝみち子は来るのが途絶えて、久しくしてからまたのっそりと来る。自分の家で世話をしている人間に若い男が一人いる、遊びに行かなくちゃ損だというくら

いの気持ちだった。老母が縁もゆかりもない人間を拾つて来て、不服らしいところもあつた。

みち子は柚木の膝の上へ無造作に腰をかけた。様式だけは完全な流なが眊しめをして、

「どのくらい目方があるか量はかつてみてよ」

柚木は二三度膝を上げ下げしたが、

「結婚適齡期にしちゃあ、情操のカンカンが足りないね」

「そんなことはなくつてよ。学校で操行点はAだつたわよ」

みち子は柚木のいう情操という言葉の意味をわざと違えて取つたのか、本当に取り違えたものか――

柚木は衣服の上から娘の体格を探つて行つた。それは栄養不良の子供が一人前の女の嬌態きやうたいをする正体を発見したような、おかしみがあつたので、彼はつい失笑した。

「ずいぶん失礼ね」

「どうせあなたは偉いのよ」みち子は怒って立上った。

「まあ、せいゝく運動でもして、おっかささん位な体格になるんだね」

みち子はそれ以後なぜとも知らず、しきりに柚木に憎みを持った。

半年ほどの間、柚木の幸福感は続いた、しかし、それから先、彼は何となくぼんやりして来た。目的の発明が空想されているうちは、確に素晴らしく思ったが、実地に調べたり、研究する段になると、自分と同種の考案はすでにいつも特許されていて、たとえ自分の工夫の方がずっと進んでいるにしても、既許のものとのかぶつ（ていしよく）を避けるため、かなり模様を変えねばならなくなった。その上こういう発明器が果して社会に需要されるものやらどうかも疑われて来た。実際専門家から見ればいゝものなのだが、一向社会に行われない結構な発明があるかと思えば、

ちよつとした思付きのもので、非常に当ることもある。発明にはスペキュレーションを伴うということも、柚木は兼ねゝく承知していることではあったが、その運びがこれほど思いどおり素直に行かないものだと、実際にやり出してはじめて痛感するのだった。

しかし、それよりも柚木にこの生活への熱意を失わしめた原因は、自分自身の気持ちに在った。前に人に使われて働いていた時分は、生活の心配を離れて、専心に工夫に没頭したら、さぞ快いだらうという、その憧憬から日々の雑役も忍べていたのだがその通りに朝夕を送れることになってみると、単調で苦澁な（くじゆう）ものだった。ときゝあまり静で、その上全く誰にも相談せず、自分一人だけの考えを突き進めている状態は、何だか見当違いなことをしているため、とんでもない方向へ外れていて、社会から自分一人が取り残されたのではないかという脅えさえ屢（しばしば）

屢起^{しばしば}った。

金儲けということについても疑問が起った。この頃のように暮しに心配がなくなりほんの気晴らしに外へ出るにしても、映画を見て、酒場へ寄って、微酔を帯びて、円タクに乗って帰るぐらいのことで充分すむ。その上その位な費用なら、そう云えば老妓は快く呉れた。そしてそれだけで自分の慰楽は充分満足だった。柚木は二三度職業仲間に誘われて、女道楽をしたこともあるが、売りもの、買いもの以上に求める気は起らず、それより、早く氣儘^{きま}のできる自分の家へ帰って、のび／＼と自分の好みの床に寝たい気がしきりに起った。彼は遊びに行っても外泊は一度もしなかった。彼は寢具だけは身分不相応のものを作っていて、羽根蒲団など、自分で鳥屋から羽根を買って来て器用^{こしち}に拵^{こしら}えていた。

いくら探して、もこれ以上の慾が自分に起りそうもない、
して仕舞った自分を発見して

柚木は心寒くなった。

これは、自分等の年頃の青年にしては変態になったのではないかしらんと考えた。

それに引きかえ、あの老妓は何という女だろう。憂鬱な顔をしながら、根に判らない逞ましいものがあって、稽古ごと一つだって、次から次へと、未知のものを食り食って行こうとしている。常に満足と不満が交る／＼彼女を押し進めている。

小そのがまた見廻りに来たときに、柚木はこんなことから訊く話を持ち出した。

「フランスレビューの大立物の女優で、ミスタンゲットというのがあるがね」

「あゝそんなら知ってるよ。レコードで……あの節廻しはたいしたもんだね」

「あのお婆さんは体中の皺を足の裏へ、括^{くく}って溜めていているという評判だが、あんたなんかまだその必要はなさそうだなあ」